

2017秋 今右衛門の色鍋島のプラチナ釉 & 縄文のビーナス

2017年秋 今年の秋の展覧会にも いくつか足を運びました

1. 兵庫県陶芸美術館特別展「今右衛門の色鍋島 煌めく人間国宝のわざと美、そのルーツ 展」
2. 京都博物館 2017 秋特別展「国宝展」久しぶりに縄文のビーナス・女神たちに出会ってきました



陶芸の郷 丹波立杭 兵庫県陶芸美術館特別展

1.「今右衛門の色鍋島展」煌めく人間国宝のわざと美、そのルーツ 2017.10.14.



10月秋も半ばになっても まだ天候不順がつづく14日 霧雨交じりの曇天でしたが、家内と二人で丹波立杭の陶芸美術館へ。兵庫陶芸美術館で開かれている特別展「色鍋島 今右衛門展」に行ってきました。日本の磁器が佐賀県有田で生まれて約400年。その有田焼400年を牽引してきた柿右衛門窯と今右衛門窯。その今右衛門窯が受け継いできた色鍋島の特別展。

山口県美祢で約7年仕事をしていた時代に、何度となく有田を訪れ、窯元が立ち並ぶ有田焼の街中を歩いたことが、何度かあり、柿右衛門窯の展示館を訪れたこともある。しかし、今右衛門窯の「色鍋島」の系統的な歴史展示や展覧会を見たことはなく、是非とも見たかった特別展。

人間国宝13代・14代今右衛門さんの作品に至る「色鍋島」の歴史展示が見られる。
素晴らしい色鍋島の繊細緻密な落ち着いた美しさに触れるとともに、14代今右衛門さんが編み出した金属釉が作り出す世界の楽しみにも触れることができたうれしい特別展でした。

◎ 柿右衛門窯の赤絵

乳白色の地肌に赤色系の上絵を焼き付けるという日本で初の赤絵付けの技法を開発し、海外輸出を契機に様式を確立した柿右衛門窯。



◎ 今右衛門窯の色鍋島 墨はじき

一方、鍋島藩の御用窯として高級磁器 鍋島焼の技法と伝統を受け継ぎ発展させ、「墨はじき」の技法をあみだし、「吹墨」「薄墨」「吹重ね(吹墨と薄墨を重ね合わせた新技法)」の技術の色鍋島に確立。伝統に新しい風を吹き込み、色鍋島の評価をさらに高めました。



色鍋島は、江戸期の佐賀・鍋島藩窯で、将軍家への献上品をはじめ、幕閣・公家・諸大名らへの贈答品、藩の城内で用いるために作られた最高級の色絵磁器で、熟練の優れた陶工たちを集め、徹底した分業体制のもとで厳正に管理し、精緻を極めた美しさと高い品格を目指したものでした。

その色鍋島の伝統を、明治期以降、今日まで継承してきたのが、藩政期に代々御用赤絵屋をつとめていた今泉今右衛門家です。その工芸技術は、重要無形文化財「色鍋島」の保持団体である色鍋島今右衛門技術保存会に受け継がれ、また、その芸術性は、同時代的美感を加える独自の表現で色絵磁器の造形美を追求し、「吹墨」・「薄墨」・「吹重ね」などの技法で現代の色鍋島を創作した十三代今右衛門(1926-2001)や、「墨はじき」という伝統の白抜き技法をメインに、色鍋島の新たな造形的魅力を追求している当代・十四代今右衛門(1962-)の作品に見事に開花しています。

本展では、2014年に陶芸家としては史上最年少の51歳で国の重要無形文化財「色絵磁器」の保持者(人間国宝)に認定された十四代の最新作から、1989年に同じく人間国宝の認定を受けている十三代をはじめ、明治期以降に色鍋島の伝統美を保持・発展させてきた十代、十一代、十二代の歴代今右衛門の作品、さらには藩窯鍋島焼の精品まで、崇高なる色鍋島370年の造形美を紹介します。

会場では、テーブルアートの第一人者・阪口恵子氏によるテーブルコーディネート展示も行います。

《色絵亀甲丸文模様鉢》
十一代今泉今右衛門
1940年 個人蔵





江戸期の佐賀・鍋島藩窯で製造された色鍋島は、精緻さと洗練されたデザインで、格調高い美しさを誇る色絵磁器。藩政期に代々御用赤絵屋をつとめた今泉今右衛門家では、その美質を今日まで伝えるとともに、新しい時代に相応しい美と品格を追求しています。人間国宝十四代今泉今右衛門をはじめとする歴代今右衛門の作品、藩窯鍋島焼の精品を通して、色鍋島370年の造形美に迫ります。

《色絵薄墨墨はじき雪文百合鉢》十四代今泉今右衛門 2008年 個人蔵
背景《色絵薄墨墨はじき雪文鉢》（部分）十四代今泉今右衛門 2011年 個人蔵

13代・14代今泉今右衛門の作品を主に色鍋島・鍋島焼 370年の歴史・作品の流れが見られる展覧会。素晴らしい色鍋島の世界に魅了されました。

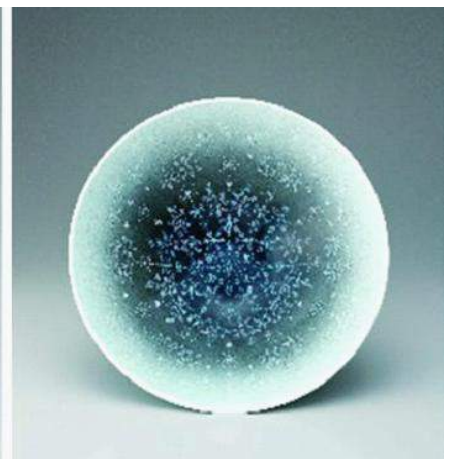
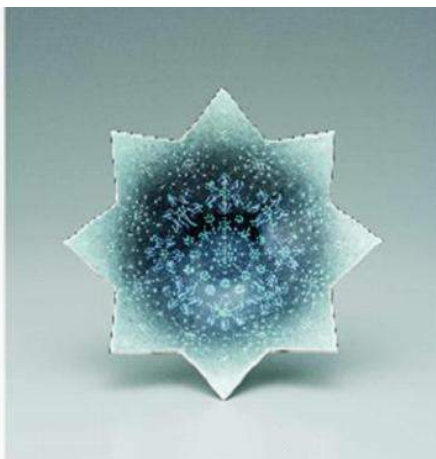


鍋島藩窯で製造された色鍋島。370年の伝統を受け継ぎつつも、新しい技法を次々と注ぎ込んで、新しい色鍋島を世に出してきた佐賀県有田の「今右衛門窯」。

古伊万里はほとんどが絵の具で線描きされているのに対し、手間のかかる墨はじきを使って背景のトーンを微妙に抑えるのは、鍋島焼だけが使う特徴。

伝統の中に独自の表現で色絵磁器の造形美を追求し、「吹墨」・「薄墨」・「吹重ね」などの技法で現代の色鍋島を創作した十三代今右衛門。墨で文様を描き、その上を染付で塗り、その後、素焼の窯で焼くと 墨が飛んで白抜きの文様が現われる当14代が編み出した技法「墨はじき」。

この技法はさらに「雪花墨はじき」の技法として結実する。



また、14代が編み出した金属「プラチナ」釉の作品には金属屋である私には「金属の持つ魅力」を呼び起こしてくれたうれしい作品でした。

青と白を基調とした絵柄の中に 金属「プラチナ」釉で緻密に描きこまれた絵柄が陽光に光沢を放ち輝き、見る方向で逐次変化する。絵付けされた図案に調和しつつも、愛でる度に見る人それぞれが発見する美しさと斬新さ。それを環境・時間が変化しても光沢を失わぬプラチナが存分に引き出している。

つつい忘れがちな金属光沢の放つ魅力を再認識させてもらいました。



「今右衛門の色鍋島」展 テーブルコーディネートコーナーで 2017.10.17.

13・14代人間国今右衛門さんの素晴らしい作品の数々とともに、久しぶりに磁器をゆっくり愛でる時間を持てたうれしい特別出でた。掲載した photo は特別展のパンフレットと撮影が許可されていた今右衛門窯の四季飾りの作品展示並びに一部インターネットから転機させていただきました。ご承知ください。

2. 京都国立博物館2017秋特別展「国宝展」 2017.10.27. 夕

久しぶりに縄文のビーナス・女神たちに出会ってきました

京都国立博物館 2017 秋の特別展「国宝展」で縄文のビーナスや女神の土偶がそろって展示されていると聞く。

「今年はなおさら。是非とも会いたいなあ」と。

国宝が勢ぞろいする特別展大勢の人出を見越して、夜

8時まで開館されている10月27日金曜日の夕方に出かけました。国宝勢ぞろいで、力が入っているようですが、今回の目的は縄文のビーナス・縄文の女神 そして十日町の火焰土器。 出会えるだけで、満足とせねばと。



「日本人の心の故郷 縄文」 人類が絶滅の危機を乗り越えてこれたエンジンは「相手を思う心」にあった。
そんな証が日本の縄文。世界に類例がない約1万年の長きにわたって途絶えることなく永続した日本の縄文
厳しい環境の中であって そんな平和な暮らしの象徴が 縄文のビーナス・縄文の女神
教科書から縄文が消え、縄文を知らぬ人が多い。 縄文の世界遺産登録にはなかなか理解が得られない。
でも 日本が世界に誇れる一番が縄文。世界の平和が一番脅かされている時代の今
こんな時代だからこそ「日本人の心の故郷 縄文」に眼を向けてほしいと。

◆【和鉄の道】日本人のふるさと 縄文 縄文の心を映すストーンサークルを訪ねる & 縄文掲載リスト

◎ <http://www.infokkna.com/ironroad/2015htm/iron11/jyomonslide.htm>

◎ <http://www.infokkna.com/ironroad/2014htm/2014mutsu/fkobe1406B.pdf>